

『学校蔵の特別授業』

尾畑留美子 著

日経BP社 (1,600円+税)
(四六判、208頁、2015.11)



「高野島、五代目蔵元
尾畑留美子

学校蔵の
特別授業

佐渡から考える島国ニッポンの未来



地域開発の読者にはなじみのある識者3人(藻谷浩介氏、酒井穰氏、玄田有史氏)と、多分なじみがない蔵元美人女将(尾畑留美子氏)との対談集である。

本書を一読すれば、今、地域振興が脚光を浴びていることが理解できるだろう。人間で言えば思春期なのである。

日本経済を午後6時と形容したのは竹内宏(2010)¹⁾であった。日本経済はキャッチアップ型の特徴を残しつつ老いて日没が過ぎた。夜明けには名実ともに先進国型に脱皮することが条件だが、そのためには量から質に転じ、東アジアと棲み分ける必要がある。

地方はその希望の舞台といえるだろう。

本書には、今までを象徴するキーワードと、これからを象徴するキーワードが、頻出する。

今までは「都会」であり、これからが「地方」である。

「都会は減点主義、地方は冒険しやすい」「生きている証に、地方に関わっては」「地方が勝つと信じている」「野心(≒東京)と志(≒地方)は違う」「若者の希望は地方にこそある」「人口が減っても供給力があればよそに売れる」

どうだろう。青春ではないか。個人的には佐渡ではなく、鹿児島が想起された。かつて焼酎ブームの少し前に赴任した鹿児島には何かが起こりそうな予感に溢れていた。

それから十余年、当時の鹿児島の空気はいま全国に満ちつつある。思春期なので、背伸びした願望があるかも知れない。高齢化した地方に似合わないキーワードかも知れない。しかし青春とは心の若さである(サムエル・ウルマン)。今までの価値観に遠いところから夜明けは始まる。

もっとも、大人になって自立するまでには、まだ長い道のりがある。これからは、食材に加え、景色、景観が、人を引き寄せるには大事だが、そのテイストの向上には、ゆっくりと20年ぐらいかかりそうと本書は指摘する。

その時間軸は現在が思春期であることを示唆している。景観以外にも、欧州のように合理的な農林漁業政策が必要となる。しかし、それは大人になってからの話。今はまず青春をエンジョイすべきだ。ものには段階が必要なのである。

20年も経てば夢多き乙女も成熟し、淡麗辛口の清酒もフルボディな古酒となる。本書を紐解けば、ほろ酔いで地域に添い寝をする夢がみられるだろう。地域との初恋を思い出したい人(これは自分だ)、地域に恋をしたい人に薦めたい。

(評者：(株)日本経済研究所上席研究主幹 佐藤淳)

1) 竹内宏 (2010)「午後6時の経済学」朝日新聞出版社